

論題	神奈川県下における稲作儀礼について～事例報告を中心に～
著者	鈴木通大
掲載誌	神奈川県立博物館研究報告—人文科学— 第15号
ISSN	0910-9730
刊行年月	1989年(平成元年)3月
判型	JIS-B5(182mm × 257mm)

神奈川県下における

稲作儀礼について―事例報告を中心に―

鈴木 通大

はじめに

神奈川県が稲作儀礼や畑作儀礼などのいわゆる農耕儀礼が希薄な地域であることは、すでに拙稿「神奈川県下の畑作儀礼について」⁽¹⁾の中でも指摘したとおりである。今回は、稲作儀礼をとりあげてみたが、今日ではほとんどみることができなくなっている習俗も少なくない。どちらかといえば、県下では稲作儀礼は消滅しているといえよう。

本県の農業は、商工業人口の急激な増加にともない、急速な都市化が進み、農耕地が減少し、同時に農業労働力も他部門へ流出して、現在では都市近郊農業の様相を呈している(第1表・第3表参照)。とくに稲作栽培の状況を見ると、収穫高は作付面積(第2表参照)に比例するように減少しているのが現状である。全国的にみれば、水稻生産力は最下位に近い状況であるといえよう。

県下の水田地帯は、昔から相模川水系、酒匂川水系の地域で占められている(図参照)。とくに足柄平野は県内に残る豊かな穀倉地帯のひとつであり、この米作の歴史は古く、八世紀頃にはすでに水田地帯であったといわれる。そのことは、小田原市鴨宮に残る条

里や同市千代(千代村)に弓削道鏡の荘園があったことから窺われよう。

本稿は、すでに発表されている民俗誌や民俗調査報告書を中心に可能な限り県下の稲作儀礼に関する事例を収集し、筆者の調査研究をもとにそれらの資料を整理分類し、若干の考察を加えようとするものである。このことは、前回の畑作儀礼に引続き、神奈川県下における農耕儀礼を研究するための予備的作業の一環⁽²⁾である。

稲作儀礼の諸相

わが国では、近年、稲の品種が改良され、科学的栽培技術が普及し、かつまた合理主義がムラ社会へ浸透するにともなうて、稲作儀礼をはじめとした農耕儀礼は、漸次、消滅してきたといえよう。

ここでは、県下の稲作儀礼を、一予祝、二播種、三田植、四成長祈願、五収穫という五つのタイプ⁽³⁾に分類して、各地の事例を紹介していく。

一 予祝儀礼

予祝儀礼は正月を中心にしてみられるが、その内容から三つに大別することができる。ひとつは、農作業のプロセスを模倣してきた年の豊作を祈念するいわゆる類感呪術的行事、ふたつは、きたる年の豊凶を占う行事、そして最後のひとつは、豊作促進に影響があ

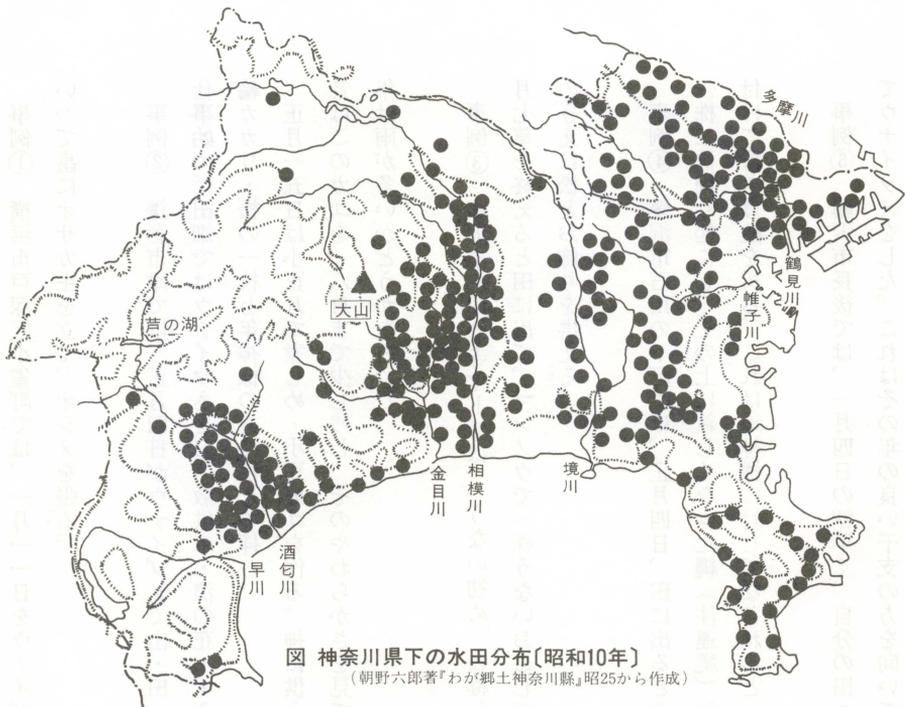


図 神奈川県下の水田分布〔昭和10年〕
 (朝野六郎著『わが郷土神奈川県』昭25から作成)

第1表 人口・戸数および面積

項目	人口・戸数・面積
総人口	7,431,794人
農家人口	228,800人
総戸数	2,491,849戸
農家戸数	45,941戸
兼業	5,789戸
	40,152戸
総面積	2,402.11km ²
耕地面積	28,200ha
水田	6,630ha
	15,080ha
	6,520ha

(県勢要覧61年度版)

第2表 耕地面積の推移

項目 年次	耕地総面積	田	畑	樹園地
	昭和35年	52,513ha	16,805ha	30,672ha
昭和40年	44,222	14,370	24,295	5,557
昭和45年	36,882	11,406	19,336	6,140
昭和50年	29,513	7,946	14,800	6,767
昭和55年	28,900	7,320	14,760	6,840
昭和60年	28,200	6,630	15,080	6,520

(農業センサスより)

第3表 農家戸数および一戸当たり平均耕地面積の変遷

項目 年次	総農家戸数	専業農家戸数	兼業農家戸数		
			計	第1種兼業	第2種兼業
昭和25年	86,027戸	40,390戸	45,637戸	20,369戸	25,268戸
昭和35年	73,873	20,733	53,140	24,914	28,226
昭和40年	66,738	14,476	52,262	20,537	31,725
昭和45年	58,949	9,843	49,106	15,565	33,541
昭和50年	51,661	6,478	45,183	11,822	33,361
昭和55年	48,626	5,922	42,704	9,885	32,819
昭和60年	45,941	5,789	40,152	8,343	31,809

(農業センサスより)

ると考えられる性的な行事である。

事例① 横浜市戸塚区小雀町では、一月一日をウナイゾメと
いって畠にオサカキを立て、オシメを張る⁽⁴⁾。

事例② 鎌倉市津では、正月四日がウナイゾメで山・田・畑の
仕事始め。田畑ではウナイマネをし、散供米・浪の花・オミキ・
輪カカリ・松の一枝と年神様の方に供えて拝む。

正月一五日は小正月で煮しめ・小豆ガユを作る。神に供える。
昔はこのカユを一八日まで少し残し、そのやわらかさを見て、今
年は雨が多いかどうかを占った⁽⁵⁾。

事例③ 藤沢市石川の寺ヤトでは、「うない初め」と称して正
月七草を終えりと田に出て、マンノウで一株うないおこして、そ
のうえに松とお飾りを供える⁽⁶⁾。

事例④ 藤沢市石川の下町では、正月四日、田に出るとクワで
一株二株掘り起こし、その上に新しくなった縄（注連縄）に幣を
付けて置き豊饒を祈る。これは地神様に対してなされるとい⁽⁷⁾う。

事例⑤ 藤沢市長後では、一月四日の朝早く、自分の田へ行っ
てウナイゾメをした。これはその年の良い干支の方を向いて三ク
ワうない、うなった頭にスゲナイと言う藁二本でなつて端を止め

ていないお飾りを置き、門松の枝を折って持っていたものを上
からつつ通して来る⁽⁸⁾。

事例⑥ 藤沢市西俣野では、正月四日をウナイゾメといって門
松を折って手近な田と畠に行つてクワイレをした。オカザリ、オ
サングを持って行き、北の方を向いてうない、松、オカザリ、オ
サングをあげた⁽⁹⁾。

事例⑦ 藤沢市円行では、ウナイゾメにはオサングをあげ、拝
んでから鋤で畠を耕す⁽¹⁰⁾。

事例⑧ 藤沢市大庭では、正月に大山（阿夫利神社）で竹の筒
を切つて、粥の中に入れておいて粥の入っている量でその年の作
柄を決めた。これをツツガユ（筒粥）という。その結果を書いた
ものを大山の御師がもってきた。それで今年は何稲がいくら、晩
稲がいくらといった。この札は見える所に貼つておいた⁽¹¹⁾。

事例⑨ 相模原市大島では、一月一四日はセエノカミの日。ま
たこの日、ニワトコの木で粟穂稗穂を作つて、明きの方にあたる
田畑へ持つて行つて松と一緒に刺す⁽¹²⁾。

事例⑩ 秦野市東田原では、一月一五日には筒粥の占いによつ

て農作物の豊凶と一ヶ年各月毎の天候も占っている。月待の宿の座敷に富士浅間の軸をかけ、神前に米一升（うるち）、小豆一合、青竹（径一センチ、長さ一五センチ、一方節付）に一月から二月までの刻印をつけ、一二本を麻糸を束ねて供え、禊祓の祝詞をよみ修祓して後、三者を神前から下げ鍋に入れる。攪拌して青竹の束を取り出し、卓子の上で月順に竹を割って中に入った米粒の数によって豊凶を占う。一二種の作物の順序は昔から決まっている。一方、燃やしている薪の小枝のおきを一月から二月まで順次用意の鉄板の上に並べて、そのおきの消え方によって天候を占う。¹³

浅間大神筒粥表¹⁴

早稲	七ト	一月	天
中手	二ト	二月	天
おく手	十ト	三月	半天
大麦	七ト	四月	天
小麦	一ト	五月	半天
大豆	六ト	六月	半天
小豆	六ト	七月	半天
粟	八ト	八月	雨
稗	五ト	九月	天
芋	七ト	十月	天
煙草	二ト	十一月	天

菜種 四ト

十二月 半天

萬十二ト作也

扶桑教

事例⑪ 大和市福田では、一月四日をシゴトハジメといい、たんぼに行き、初鋤を入れ、山林ではめぼしい木の枝を切る。ともに門松の小枝やメ飾り・餅などを供えて豊作を祈る。¹⁵

事例⑫ 座間市栗原では、ウナイゾメは四日で田へ出て、五鋤位うなつて松とハオカザリを立てる。一四日前に取る。

同市小池のウナイゾメは一日で松にお散供を供える。¹⁶

事例⑬ 南足柄市関本・向田では、正月のしめ飾りには農具にもつけるが、しめ飾りで浄められた鋤と櫛、団子を持って田へ行き、中央に櫛を立て、鋤につけたシメ飾りを櫛につけ、その前に、鋤で盛土を三つ作る。この盛土に団子をのせて、付近の稲むらに隊ける。

食物が不足した冬、空腹な鳥が舞い下り、団子をつつくのを待つ。もし鳥が上手のを最初についたら、早稲、中のだったら中稲、下手のものだったら晩稲、とその年に播く稲の種子を占う。これを、関本では二月の初午の日、向田では一月一日に行う。¹⁷

事例⑭ 中郡大磯町生沢では、一月四日をウナイゾメといい、

朝、田んぼと畑へ行き榊を立て、辰巳の方角を向き一畝入れてお飾りと餅を細かく切って半紙に包んで、うなつた所へ置き拝む¹⁸⁾。

事例⑮ 中郡大磯町虫窪・黒岩では、正月一四日にデエノコングウの若い木を二〇センチ位に切って皮をはぎ、真中へフシをおいて両端から幹を鎌で、薄くそぐように削ってケズリカケをつくり、一方の端を四つ割にしてダンゴを一つ挟んで家の中の勝手の手長押に飾った。ケズリカケは稲穂を表わし、農作物が豊かにみられるようにとの願いがこめられている¹⁹⁾。

以上が県下でみられる予祝儀礼の様相である。この儀礼は、ウナイゾメといわれ、基本的には、正月の四日あるは一日に畝を携えて田圃にでかけ、よい方角に向けて土を耕し、松飾りや餅などを供えてくる畝入れの儀礼であり、いわゆる年中行事でいわれるところの仕事はじめである。この儀礼は、畑作地帯でも畑作儀礼と稲作儀礼とが重層して行われているが、この地帯ではどちらかといえれば畑作儀礼の性格が強いといえよう。

今回の稲作儀礼では、粟穂稗穂に代表されるモノツクリの儀礼はほとんど予祝儀礼の範疇には含まなかった。とくに、粟穂稗穂は本来的には畑作儀礼といわれているが、その際につくられたケズリカケを播種の時に水口へ挿している事例がわずかにみられる。また、事例⑮にみられるようにケズリカケを藪玉ではなく、稲穂を表徴している事象はめずらしい事例であるといえよう。

豊凶を占う儀礼は、事例②、⑧、⑩、⑬にみられる。事例⑧では大山阿夫利神社で一月七日に行われる筒粥神事の結果に基づいて作物を決めているが、事例⑩では月待のヤドで一月一四日に筒粥で農作物の豊凶と、あわせて粥を炊く薪の小枝を用いて天候も占っている。

この筒粥神事に対して、事例⑬にみられる烏喰いの年占がある。烏は八咫鳥から想像されるように神の御使いとか、神が変身した姿と考えられている。そこで、烏がそれぞれの団子を食べることで一種の託宣だと考えられている。

なお、神奈川県下では東北地方で顕著にみられる農作業のプロセスを模倣してきたる年の豊作を祈念する類感呪術的行事や性的な行事がほとんどみられなくなっているのが現状である。

二 播種儀礼

播種儀礼とは、播種に際して、苗代の水口に花・木・草などという依代を立てることで、さらに余った種粒で焼米をつくり、それを水口に供える祭りである。

事例① 横浜市戸塚区小雀町では、四月二七、八日ごろ種下ろしをする。終わると水口に山吹の枝をさし焼米を供える。農家は焼米ツキをするので、子どもが袋を持ってもらいに歩く。「焼米くん焼米くん、くれねば苗間にとびこむぞ」などと唱える²⁰⁾。

事例② 川崎市川崎区大師河原の日の出町では、みの口まつり
と云って、苗代に種子をまくがその余ったモミで焼米をつくり、
水口に二本の竹棒を立て、お札紙を入れた焼米を支えて供えた。⁽²¹⁾

事例③ 川崎市多摩区宿河原では、米の播種をした残りのモミ
をふかし、炒つてこげたものを臼でつく。ニワトコの枝を二本とつ
て先を割り、御嶽神社のお札をはさんで中に焼きモミを入れて水
口に立てる。これを水口祭りといい、昭和の初め頃はどの農家も
していた。⁽²²⁾

事例④ 平塚市城所では、種播きがすむと、一月一五日に使つ
たケエカきボウに神社から配られた苗代のお札を挟んで苗代田の
水口に立て、そこに焼米を三ヶ所に分けて供えてきた。その後、
立杵で焼米を搗いて子どもたちに食べさせた。⁽²³⁾

事例⑤ 藤沢市大庭では、種マキ正月とか、種ふり祝いといい、
苗場に種がまき終ったあとにした。五月の節供前になる。焼米を
余分にひやかしておいた粃で作った。苗場のミノクチに焼米をお
ひねりにして三ぼっち、これは早稲、これは中手、これは晩稲と
決めてあげた。大晦日に年男が作つて年神にあげておいたダイノ
コンゴのケズリカケを苗場のミノクチにさした。⁽²⁴⁾

同市下土棚では、ナエマに種が播き終ると焼米を搗いた。若い

頃には近隣の若い男女が寄つて歌をうたいながらした。⁽²⁵⁾

事例⑥ 三浦市須軽谷では、苗代に播種後、湯に入るとネーマ
が荒れると云つて風呂に入らなかつた。播種に使つたザルは三日
間大神宮に供えた。⁽²⁶⁾

事例⑦ 秦野市今泉では、苗代を作つた日、白い粥をつくり神
棚に供え家族も食べる。この粥を苗代粥といふ。⁽²⁷⁾

事例⑧ 伊勢原市東富岡では、苗代へ播種が終わると、焼米を
田の水口にあげ、カツノキをとつてきて一尺くらいの長さにし、
削り掛を水口に立てた。⁽²⁸⁾

同市下平間では、正月一四日の削り掛けをナガシにさして残し
ておき、播種きの日、水口に持つていく家もある。⁽²⁹⁾

事例⑨ 海老名市上郷では、五月初旬、種蒔きが終わると、赤
飯を作り、種粃の残りを焼いて粃がらをとり豆を入れてお湯でと
かして食べた。焼米祝いといふ。⁽³⁰⁾

事例⑩ 高座郡寒川町倉見では、昔は五月初めごろまでに播種
をすませ、五月の節供前に苗代に播いた残りの粃で焼米を作つた。⁽³¹⁾

事例⑪ 中郡大磯町虫窪・黒岩では、粃をまき終えた晩、いい

苗が取れるように苗代祝いをやる。マキアゲともいう。お粥か小豆飯とイトコ汁をつくり、神さんや仏さんへあげて食べる。イトコ汁はノブキ・里イモ・ニンジン・ゴボウ・豆腐・ササギを入れ、ごとごと煮て味噌を入れたものである。また、焼米といい、まき残りの粃を干し白ですり、大豆を入れて炒つてふかし、神さんや仏さんにあげ食べる。これを半紙に包んで苗代のこばへあげた。これはカラスやスズメにまいた粃を食われないようにするマジナイである。⁽³²⁾

事例⑫ 足柄上郡山北町共和地区では、四月末に苗代を作る。終ると水口に焼米をオサンゴにして撒く。⁽³³⁾

以上が、神奈川県下でみられた播種儀礼であり、その大部分が播種が終わった後に、山吹の枝、粥掻き棒、ケズリカケなどの依代を水口に立て、同時に残った種粃で焼米をつくって水口に供えている。

三 田植儀礼

田植とは苗代で育てた稲苗を本田に植え付ける作業で、田植儀礼はその田植前後にともなう祭りである。田植は、本来、「田の神」を迎え、神前で田植えをし、田植えを終えてから「田の神」を送るという厳肅で賑やかな祭りである。

事例① 川崎市多摩区菅では、田植えのあと、焼米を水口にあげた。紙に包んで竹の先を割り、それにはさんで水口に立てる。⁽³⁴⁾

事例② 川崎市麻生区岡上では、田植を終えた時、サナブリといて煮物やそばを作り、イイ仕事で手伝いに来てくれたクミアイや講中の人々を招いてご馳走する。また、田植正月といい、町内会長（以前は区長）がフレを出し、一日仕事を休んだ。⁽³⁵⁾

事例③ 平塚市土屋では、春の田植えの時に稲の苗を三把取り、荒神様に供え、一ヶ月ぐらいで下げて田圃へ持って行く。そうすると稲に悪い虫がつかない。⁽³⁶⁾

事例④ 藤沢市今田では、田植えアガリといて、植え田が終わったお祝いで各家でする。植え田に使った道具をきれいに洗ってしまい、赤い御飯を作って酒を飲んだ。植え田のポタモチといて植え田が終わってポタモチを作った。⁽³⁷⁾

事例⑤ 藤沢市大庭では、ナエマを植えると田植えは終る。この時にオオダウエといてアズキメシを作って食べた。⁽³⁸⁾

事例⑥ 藤沢市西俣野では、田植え祝いといて、田植えが済むと、その日アズキメシなどを作って食べた。この時には苗を三把をお盆にのせて家に持って行って植えた。二、三〇年前までは

この辺りではどこの家でもしていた。⁽³⁹⁾

あるいは、植え田が済むと荒神さんに苗を一把よく洗ってあげる家もあった。この苗はあとで川に流してしまふ。大正の初めまでした。⁽⁴⁰⁾

事例⑦ 藤沢市円行では、植え田が終わると植え田祝いをやった。手伝ってくれた者を呼んだり、その人のところにシルシをしたりした。赤飯をたき、コツケ餅(餅にアンをつけたもの)を配った。コツケ餅は神棚にお供えした。⁽⁴¹⁾

事例⑧ 相模原市上鶴間では、田植の終わった頃、田植ぼた餅と称してぼたもちをつくる。⁽⁴²⁾

事例⑨ 三浦市初声町三戸では、ナエニカミ(苗の神)といって苗二把を膳にのせ強飯を供えカッテ(勝手)に置く。⁽⁴³⁾

事例⑩ 三浦市毘沙門では、田植えに苗一把をオカマ様に供え、田植えじまいにはナエマに赤飯を供える。⁽⁴⁴⁾

事例⑪ 海老名市上郷では、三〇年ぐらい前までは七月一日から一週間ほどで田植をした。終わると赤飯を作り、苗を三束荒神様にあげて田植の祝いをした。正月に年神棚に供えた餅を田植の頃に炒ったり油であげたりして食べる。⁽⁴⁵⁾

事例⑫ 中郡大磯町では、田植が終わるとカマド(荒神さん)の上に塩をみぼっちゃと稲束を一把づつあげる。ボタモチか、アニコ餅をつくり、神さん・仏さんへあげ食べる。⁽⁴⁶⁾

事例⑬ 足柄上郡山北町共和地区では、田植が終わると、苗三把をオカマ様(荒神)に供え、村全体が集まって酒を飲む。⁽⁴⁷⁾

事例⑭ 足柄下郡箱根町仙石原では、苗をかまど荒神に供えた後、その前で早乙女が田植歌を歌った。⁽⁴⁸⁾

事例⑮ 津久井郡藤野町名倉では、田植え後、苗をエビス様に供える。⁽⁴⁹⁾

以上の事例からもわかるように、神奈川県下では田植え前に行われる儀礼がみられず、田植えが終わると苗束を荒神様に供える儀礼が顕著にみられ、さらに小豆飯や牡丹餅などのご馳走を拵えて食べられている。事例⑮では、荒神様でなくエビス様に苗を供えている。

なお、神奈川県下にはいわゆる「田の神」信仰がみられないので、したがって田の神降ろしの行事などがみられない。

四 成長祈願儀礼

田植から収穫にいたる期間で、稲の生育を制約するのが虫害と天候の影響 Ⅱ 干害である。それらの災いを除いたり、祓つたりすることを目的とするのが成長祈願儀礼である。とくに、虫送りや雨乞いの行事は、今日のように科学が発達していない時代には重要な祈願であった。

では、最初に虫送りの様相を紹介しよう。虫送りとは、稲などの虫害を悪霊のしわざと考えて、これをムラから追放する共同祈願のひとつで、定期的に行われる地域と虫害が起きた時に臨時に行われる地域とがある。

事例① 鎌倉市津では、盆の頃、田に青竹を立ててしめをはり、手広との境の庚申様まで田の虫を送った。⁽⁵⁰⁾

事例② 藤沢市今田では、七月二八日、竹で籠のようなものを作り、その中に虫を入れて持ち、さらに各自はいろんな色の紙で作った旗を持ってお宮さん(鯖明神社)から出る。「稲の虫を送れ」と大声でいいながら村の中を歩いて今飯橋のあたりで虫を入れた籠のようなものと旗を境川に流した。⁽⁵¹⁾

事例③ 茅ヶ崎市芹沢では、虫送り正月といい、仕事を休む。神主からもらったお札を田や畑へ立てる。昔は行列を作り太鼓を叩いて、稲の虫送れといいながら村境まで虫送りをした。⁽⁵²⁾

事例④ 大和市福田では、鉦と太鼓をたたいて田畑の中をまわり、最後には隣村との境まで行って送り出した。その時、「サイトコ ベットコ サーネモリ 米の虫をも ひっしやげた」と唄った。⁽⁵³⁾

事例⑤ 海老名市上郷では、九月九日ごろ虫送りをした。ジョウツゲが各家をまわってお神酒銭といって銭をもらって歩き、その金で村人皆が有鹿神社へ集まって神主に祝詞をあげてもらい飲む。⁽⁵⁴⁾

事例⑥ 足柄上郡山北町共和地区では、六月中に杉の葉でお宮をつくって、二人の者がかついで、ムラの畑のまわりを廻り、終ると山の中へ入って捨てて来る。また、不動さんから虫封じのお札をもらって来て田畑に立てておく。⁽⁵⁵⁾

以上が県内の各地で行われている虫送りの様相である。

つぎは雨乞いについて紹介しよう。雨乞いとは、水不足に悩むと行われる共同祈願のひとつである。例えば、雨乞いにはいくつかのタイプがあることがよく知られている。⁽⁵⁶⁾

(1) 千駄焚きともいわれ、山上で火を焚くタイプ

(2) 大山・箱根山・榛名山などの聖地から水を貰い上げ、田畑に撒くタイプ

(3) 沼や滝壺などに石や汚物等を投げ入れて、竜神を怒らして雨を降らすタイプ

(4) 歌・踊り・女相撲などを奉納して、神のこころを柔らげようとするタイプ

(5) 神社や寺院に参詣し、祈禱するタイプ

県下の様相は、次の通りである。

事例⑦ 横浜市瀬谷区瀬谷の橋戸では、雨が降らないと神社の境内にムラの全員が集まって、藁で大きな竜一匹と小さな竜千匹をつくった。大きい竜は太さ三〇センチメートル、長さ五メートルの大きさである。小さい竜は藁の一本ねじりである。この竜でムラの中をねり歩きながら、本郷にある用水の堰まで出かける。そして、堰の中に入り、水を掛け合いながら「六根清浄」を唱えた。堰の取水口は境川である。

また、その時に体が大きく力のある者が堰の中に入って、西福寺の半鐘を頭からかぶっている。そこをめぐって皆が水を掛けた。その間、宝蔵院の僧侶が来てお経を唱えたという。

さらに、二人で大山の水を貰いに行つた。途中で休んではいけないといわれるので、別の二人が厚木あたりまで迎えに行つた。この水を堰の中に撒いたという。⁽⁵⁷⁾

事例⑧ 川崎市麻生区岡上では、天気続きで雨が降らない時は雨乞いをした。ムラ総出で岡上神社に集まり、神主さんに祝詞をあげてもらい、その後、鶴見川に男衆が裸で入り、水のかけっこをした。あるいは、大山まで代表二人が筒を持って出かけ、大山不動の滝の水をもらい。その水を岡上橋の所から鶴見川へ流し、皆で川へ入って水浴びをして雨の降ることを祈つたという。⁽⁵⁸⁾

事例⑨ 平塚市下島では、神社にある小さい池をさらってきれいにすると雨が降るといった。⁽⁵⁹⁾

事例⑩ 茅ヶ崎市芹沢では、日照が続くとまず神社に集まって祈願する。それでも降らない時は神社の鐘を小出川に入れて水をつける。それでも降らないと、青年が榛名山や大山へ行つて徳利に水をいただいて来て神社に供えるという。⁽⁶⁰⁾

事例⑪ 愛甲郡清川村煤ヶ谷では、雨が降らないと、雌雄二匹の竜をつくり、それぞれの竜に魂を入れてから、これを担いで鉦や太鼓を叩き、踊りながら、ムラの中を練り歩いて雨乞いをしたという。最後に、これらの竜は川の淵に沈められる。この行事は、六〇年ほど前まで行われていた。⁽⁶¹⁾

以上の事例からもわかるように、県下には千駄焚きともいわれる

山上で火を焚くタイプがみられないが、川崎市の調査結果⁽⁶²⁾からも窺えるように大山の阿夫利神社などの霊水を貰ってくる形態がよくみられる。近年、ムラ社会から雨乞いの習俗が消滅したが、現在でも水道局、電力会社、傘屋、長靴屋、スキー場などに携わる人びとが大山の阿夫利神社に雨乞いで参詣しているという。

雨乞いの結果、雨が降るとオシメリ正月などと称して仕事を一日休んだという。

これらの雨乞いとは反対に、雨が降り続いて困る時には晴天を祈願することもあった。このことを照乞いなどといい、雨乞いにくらべて少なかった。次の事例でもわかるように、天道念仏と称して天気を祈願して念仏を唱えたという。

事例¹² 中郡大磯町西久保では、テントウ(天道)念仏といい、雨が一週間も一〇日も降り続けているような時に早く天気になつて欲しいという願いをこめて、宿の家では神をあげて念仏をあげた。⁽⁶³⁾

また、風などの害から農作物を守るために祈願する行事は、風祭りといわれる。県下の事例は次の通りであるが、風祭りや雹祭りは多くの地域でよくみられ、その内容は酷似している。

事例¹³ 藤沢市用田では、風で作物が荒されないようにといつて九月一日にお宮に寄つて風祭をする。神主を呼んで、みんなで

拝む。⁽⁶⁴⁾

事例¹⁴ 足柄上郡山北町共和地区では、風祭りは二十十日頃に行われ、八朔ともいつている。全戸の人が宿に集まって酒を飲むのである。宿は廻り番である。⁽⁶⁵⁾

五 収穫儀礼

収穫儀礼とは、稲刈りの終了を祝う祭りである。この収穫儀礼は、わが国では刈入れのまえの初穂の儀礼と、刈入れ後の儀礼とが重なつて二重構造をなしているといわれる。

わが国で行われる収穫儀礼は、行事の名称・内容・期日から五つのタイプに分類されている。⁽⁶⁶⁾それは、刈上げ型、トーカーヤ型、アエノコト型、亥の子型、丑の日型という順序で、東北地方から九州にかけて分布している。

刈上げ型は、稲束や新米を祀つたり、単なる収穫を祝うタイプで東北地方に広く分布している。トーカーヤ型は、一〇月一〇日に子どもが藁棒で地面を叩いたり、あるいは田圃から案山子を家に持って帰り、祀るタイプで、関東・長野・静岡一带に分布している。アエノコト型は、能登半島にだけに分布しているタイプで、「田の神」を田から家に迎えて歓待する収穫祭である。亥の日型は、一〇月中の亥の日に子ども組が唄をうたいながら戸口などで石を叩いたり、藁棒で地面を打つタイプで、西日本一帯に分布している。丑の日型

は、一〇月の丑の日に一家の主人が田圃に刈り残した稲束を刈り取って家に運びこむタイプで、北九州の一部に分布している。

県下の事例は、次の通りであるが、大部分が単に収穫を祝う儀礼である。

事例① 川崎市麻生区岡上では、稲刈りを終わるとコキアゲのぼた餅を作り、手伝いに来てくれた人々に配る。また、カリアゲのおかゆと違って小豆粥を作り、うどんをゆで、ドジョウガユという名で食べた。⁽⁶⁷⁾

事例② 川崎市麻生区黒川では、稲を刈って最後の一把を「かかしさまに上げる」といって、えびす様に供える。一般にはぼた餅をあげるといふ。⁽⁶⁸⁾

事例③ 平塚市城所では、一月九日を田の神節供といい、赤飯を作って神にあげる。それを蛙が背負って行くのを大根がのびあがってみるので、この頃大根がのびはじめるのだといふ。⁽⁶⁹⁾

事例④ 藤沢市長後では、稲を刈り終ると刈り上げ祝いとしてオコウをたいて、神棚をはじめいろいろの神様にお供えた。⁽⁷⁰⁾

事例⑤ 藤沢市今田では、カリアゲといつて、稲刈りが終わると赤い御飯を作って祝った。⁽⁷¹⁾

同市大庭では、アズキメシを炊いて神棚にあげて報告した。⁽⁷²⁾ また、同市打戻では、ボタモチや赤飯を作り、鎌と刈り台をきれいにして供える。⁽⁷³⁾

事例⑥ 藤沢市大庭では、コキアゲといつて、稲がこき終わるとアズキメシを作って食べた。センバにも供えた。⁽⁷⁴⁾

同市高倉では、米の飯を炊いて神棚に供えたりして食べた。⁽⁷⁵⁾ また、同市長後では、コキアゲ祝いとしてオコウをたき、神棚に供えた。⁽⁷⁶⁾

事例⑦ 藤沢市石川の寺ヤトでは、収穫が終わると新穀を飯にして大神宮様に「初米」として供えた。また、刈り上げ、扱き上げごとに、赤飯や餅を作って大神宮様に供えた。⁽⁷⁷⁾

事例⑧ 藤沢市用田では、稲の収穫がすんでからお初穂といつて新穀を荒神様にあげる。⁽⁷⁸⁾

事例⑨ 大和市福田では、亥の子にはぼた餅をつくる。亥の子のぼた餅をつくと蛙がしょって歩く。畑で大根がほしがって首をのばすといふ。⁽⁷⁹⁾

事例⑩ 海老名市上郷では、刈り上げが終わると神棚のほか、鎌などに赤飯を供えて刈り上げ祝いをした。⁽⁸⁰⁾

また、脱穀が終わると神棚のほか脱穀機などに赤飯を供えて脱穀祝いをした。⁽⁸¹⁾

事例⑪ 綾瀬市早川では、だいたい一〇月ごろ、稲の刈り上げが終わると各家ごとに赤飯などをつくって祝った。刈り上げの祝いという。⁽⁸²⁾

事例⑫ 綾瀬市早川では、だいたい脱穀が終わると、赤飯を炊いて祝った。コキアゲの祝いという。⁽⁸³⁾

事例⑬ 中郡大磯町では、一月の亥の日を亥の子のポタモチといい、この日ポタモチをつくって食べる。⁽⁸⁴⁾

事例⑭ 足柄上郡中井町境では、「いのこ」には「いのこのぼたもち」をつくり、イノシシの絵の表具に供える。⁽⁸⁵⁾

事例⑮ 足柄下郡箱根町仙石原では、収穫後、米をかまど荒神に供える。⁽⁸⁶⁾

事例⑯ 足柄下郡湯河原町鍛冶屋では、「いのこ」の時は「いのこ」のぼた餅をつくる。いのこは百姓の神で物をふやしてくれろといい、「いのこ」のぼたもちはとったり、やったりするものだという。⁽⁸⁷⁾

以上の事例からもわかるように、県下の収穫儀礼は、稲の刈り取りを祝う刈り上げの儀礼と、稲の脱穀を祝う扱上げの儀礼が大部分である。しかも、関東の諸県や長野県のようなトウカンヤ（十日夜）行事がなく、亥の子の伝承がみられるが藁鉄砲や亥の子石で子どもたちが地面を搗いて歩く習俗はみられない。⁽⁸⁸⁾どちらかという事例⑨でもみられるように、単に亥の子の牡丹餅をつくったり、さらにその餅を蛙が背負っているという伝承が数多くみられる。大根が成長するという伝承が数多くみられる。

この亥の子については、小川直之氏が「田の神節供」と関連させて考察しているが、その中で亥の子の伝承が麦作の豊作と結びついていることや田の神節供の伝承と同類型であることを指摘している。⁽⁸⁹⁾

とりわけ、県下の収穫儀礼で興味深い点は、事例②において「最後の稲束」⁽⁹⁰⁾儀礼がみられることである。この点に関しては、麻生区黒川、同区栗木周辺でたびたび調査を試みたが、すでに現時点では伝承の存在すら確認することができなかったのは残念である。

おわりに―若干の問題点―

神奈川県下における稲作儀礼は、前回に発表した畑作儀礼と同様にきわめて希薄である。このことは、急速に進む都市化に伴う農地の減少や専業農家の減少、さらに科学的な農業技術の進歩によって伝統的な農業が崩壊寸前にあることと無関係ではないだろう。しか

しながら、神奈川県下では断片的であるが、稲作儀礼をかいまゐることができるといえる。

ここで問題となるのは、神奈川県下の農耕儀礼がはじめから希薄な地帯であったのか、あるいは日本各地で見られるような農耕儀礼が伝承していたが漸次、消滅して今日に至っているのか、ということである。現状では、まだ結論を出すには十分に検討するデータが完備していない。しかも、今回は前述したように、神奈川県下における農耕儀礼を研究するための予備的作業の一環で、データの蓄積と整理をめざす段階である。したがって仮に、これらの点が明らかになるならば、神奈川県下における農耕儀礼の研究にひとつの光明を与えることになるだろう。

例えば、神奈川県下の稲作には、県西部に広がる早乙女が関与する本格的な植え田法と、相模川流域から東部にみられる摘田から移行した植え田法がみられることが知られている。そこで、これら問題についてもひとつの糸口が与えられ、さらに新しい展開が期待できるようになるだろう。

本稿は、稲作儀礼の事例を紹介することを第一義としているので、水稻の栽培技術やそれに伴う農具（民具）を儀礼などと関連させて考察する複合的な視点が今回も欠落しているが、この点に関しては別の機会に取り上げたいと考えている。

最後に、本稿をまとめるにあたっては、多くの民俗調査報告書等も活用させていただいたが、ここに謝意を表して終わりたい。

注

- (1) 拙稿「神奈川県下の畑作儀礼について―事例報告を中心に―」、『神奈川県立博物館研究報告（人文科学）』第二二号、一九八五。
- (2) 福田アジオ氏は、「民俗学は全国各地から集めた資料を類型化し比較することによって歴史の変遷を研究するもの」という固定観念を破る必要がある。本稿が示すように、類型化と比較は問題の所在と展望を与えてくれる。しかし、その結論は決して歴史の変遷という形で出てこないし、単なる中間的な予想にすぎない。真の解答は、その民俗が伝承されている地域において分析し、歴史的性格を明らかにすることで得られる」と指摘しているが、筆者も基本的に同意している。しかしながら、今回の方法は地域が捨象される点を十分に承知しているが、あえて全体像を把握するために類型化を試みている。次の段階からは地域での分析を試みたい。福田アジオ著『時間の民俗学・空間の民俗学』木耳社、一九八九、二六〇頁。
- (3) 杉山晃一「農耕儀礼」（石田英一郎・泉靖一・宮城音弥『現代文化人類学』4、一九六〇、所収）。伊藤幹治『稲作儀礼の研究―日琉同祖論の再検討―』一九七四。
- (4) 神奈川県史編集室『神奈川県民俗資料調査報告』2、一九七二、一六頁。
- (5) 神奈川県史編集室『神奈川県民俗資料調査報告』3、一九七三、四一―四五頁。
- (6) 藤沢市教育文化研究所『稲作慣行調査報告書―藤沢市石川地区―』一九七三、二三頁。
- (7) 前掲(6)、一三三頁。
- (8) 藤沢市教育文化研究所『稲作慣行調査報告書―下土棚・長後・今田・高倉―』一九七四、九八頁。
- (9) 藤沢市教育文化研究所『稲作慣行調査報告書―大庭地区・西俣野地区―』一九七四、八三頁。
- (10) 藤沢市教育文化研究所『稲作慣行調査報告書―円行・打戻・用田―』

- 一九七六、四四頁。
- (11) 前掲(9)、四三頁。
- (12) 前掲(4)、三九頁。
- (13) 前掲(4)、七六頁。秦野市東田原では、今日でも行われている行事である。
- (14) 前掲(4)、七二頁。
- (15) 前掲(4)、四九頁。
- (16) 前掲(4)、六〇頁。
- (17) 川口謙二著『相模国武藏国 土風記』錦正社、一九六二、一一―一二頁。
- (18) 大磯町教育委員会『大磯町生沢地区民俗資料調査報告書』一九七五、二二頁。
- (19) 大磯町教育委員会『大磯町黒岩・西久保・虫窪地区民俗資料調査報告書』一九七八、三一―三三頁。
- (20) 前掲(4)、一三頁。
- (21) 川崎市民俗文化財緊急調査団編『大師河原の民俗』川崎市教育委員会、一九八三、一一三頁。
- (22) 川崎市民俗文化財緊急調査団編『稲田の民俗』川崎市教育委員会、一九八五、一一〇頁。
- (23) 神奈川県立博物館『相模川下流域の民俗』一九七〇、一一〇―一一一頁。
- (24) 前掲(9)、四三頁。
- (25) 前掲(8)、五一頁。
- (26) 和田正洲『神奈川県の農林業』(『関東の生業』農林業)明玄書房、一九八〇、所収、三六八頁。
- (27) 前掲(26)、三六八頁。
- (28) 前掲(26)、三六七頁。
- (29) 前掲(26)、三六七頁。
- (30) 神奈川県立博物館『相模川流域の民俗』一九六八、一一一頁。
- (31) 前掲(23)、一一一頁。
- (32) 前掲(19)、三九頁。
- (33) 東京教育大学民俗学研究会『西丹沢の民俗』足柄上郡共和村』一九六二、五四頁。
- (34) 前掲(5)、二二頁。
- (35) 川崎市民俗文化財緊急調査団編『岡上の民俗』川崎市教育委員会、一九八二、六四頁。
- (36) 前掲(5)、五〇頁。
- (37) 前掲(8)、一二八頁。
- (38) 前掲(9)、四三頁。
- (39) 前掲(9)、八九頁。
- (40) 前掲(9)、八九頁。
- (41) 前掲(10)、四八頁。
- (42) 相模原市教育委員会『年中行事調査報告書』一九八一、五六頁。
- (43) 和田正洲著『日本の民俗 神奈川』第一法規、一九七四、五六頁。
- (44) 前掲(26)、三六八―三六九頁。
- (45) 前掲(30)、一一―一二頁。
- (46) 前掲(19)、四一頁。
- (47) 前掲(33)、五四頁。
- (48) 前掲(43)、五六頁。
- (49) 前掲(26)、三六八頁。
- (50) 前掲(5)、六五頁。
- (51) 前掲(8)、一二九頁。
- (52) 前掲(23)、一一三頁。
- (53) 前掲(4)、五〇頁。
- (54) 前掲(30)、一二二頁。
- (55) 前掲(33)、五五頁。
- (56) 高谷重夫著『雨乞習俗の研究』法政大学出版局、一九八二。
- (57) 筆者調査。
- (58) 前掲(35)、六三頁。
- (59) 前掲(23)、三七頁。

- (60) 前掲(23)、三七頁。
- (61) 筆者調査。
- (62) 川崎市博物館資料調査団編『川崎の雨乞い』川崎市市民ミュージアム準備室、一九八九。
- (63) 前掲(19)、五六頁。
- (64) 前掲(10)、一九〇頁。
- (65) 前掲(33)、五六頁。
- (66) 前掲(2)。
- (67) 前掲(35)、六四頁。
- (68) 前掲(43)、五六頁。
- (69) 前掲(23)、一一六頁。
- (70) 前掲(8)、一〇五頁。
- (71) 前掲(8)、一二九頁。
- (72) 前掲(9)、四四頁。
- (73) 前掲(10)、一三八頁。
- (74) 前掲(9)、四四頁。
- (75) 前掲(8)、一六九頁。
- (76) 前掲(8)、一〇五頁。
- (77) 前掲(6)、二七頁。
- (78) 前掲(10)、一九二頁。
- (79) 前掲(4)、五一頁。
- (80) 前掲(30)、一一四頁。
- (81) 前掲(30)、一一四頁。
- (82) 神奈川県立博物館『県史部の民俗(Ⅰ) 大和・綾瀬地区』一九七三、九一頁。
- (83) 前掲(82)、九一頁。
- (84) 前掲(19)、四七頁。
- (85) 神奈川県史編集室『神奈川県民俗資料調査報告』1、一九七〇、四九頁。
- (86) 前掲(43)、五六頁。

- (87) 前掲(85)、一〇八頁。
- (88) 田中宣一著『神奈川県歳の時習俗』(『関東の歳時習俗』明玄書房、一九七五、所収)、三七頁。
- (89) 小川直之『田の神節供—民俗文化の地域性—(下)』『平塚市博物館研究報告 自然と文化』第一〇号、一九八七。
- (90) 拙稿『最後の稲束』『儀礼について』(『日本民俗学』第一〇九号、一九七七、所収)を参照。
- (91) 前掲(89)。

参考文献

- ・ 福島要一著『米』岩波新書、一九五二。
- ・ 宇野円空著『マライシアに於ける稲米儀礼』、東洋文庫、一九四〇。
- ・ 安藤広太郎著『日本古代稲作史雑考』、地球出版、一九五一。
- ・ 永井威三郎著『米の歴史』、至文堂、一九五九。
- ・ 酒井卯作著『稲の祭』、岩崎美術社、一九五八。
- ・ 倉田一郎著『農と民俗学』、生活社、一九四四。
- ・ 日本学士院編『明治前日本農業技術史』、日本学術振興会、一九六四。
- ・ 佐々木高明編『日本農耕文化の源流』、日本放送出版協会、一九八三。
- ・ 佐々木高明著『稲作以前』、日本放送出版協会、一九七一。
- ・ 柳田国男・安藤広太郎・盛永俊太郎他著『稲の日本史上・下』(復刻版)筑摩書房、一九六九。
- ・ 坪井洋文著『イモと日本人』、未来社、一九七九。
- ・ 坪井洋文著『稲を選んだ日本人』、未来社、一九八二。
- ・ 早川孝太郎著『農と祭』、ぐろりあ・そさえて、一九四二。
- ・ 小野重朗著『農耕儀礼と研究』、弘文堂、一九七〇。
- ・ 古野清人著『農耕儀礼の研究』、東海大学出版会、一九七四。
- ・ 芳賀日出男著『田の神—日本の稲作儀礼—』、平凡社、一九五九。
- ・ 神奈川県史編集室『神奈川県史—民俗編—』、一九七七。
- ・ 永田衡吉著『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』、錦正社、一九八七。
- ・ 永田衡吉著『神奈川県民俗芸能誌(増補改訂版)』、錦正社、一九八七。